

報



會

會 岳 山 本 日

70

月 一 十 年 二 十 和 昭

山の繪のために

高橋文太郎

日本山岳協會の展覽會が開かれてから恰度二回目である。會員の特色は他の畫會に見る場合と異つて、多くの人が一方において山を好み又實際に山へ登つてゐる實踐家である點である。これは極めて大いの特徴で、現代獨逸のアルプス畫家として名の知れてゐるワルデ Alons Waidel とかパウリドル Otto Baundt とかホルツァー Adalbert Hozer 又はシェネツカー Toni Schonecker、ウィーランド H. B. Wieland といった人達と同じやうな傾向をもつてゐるとも云へやうか。英國生れで獨逸の山へ入りこんだといふコムプトン E. T. Compton もこのやうな傾向をもつた一人であつた。何れも山に對して實踐的な方面を忘れなかつた人達である。しかし山が好きで山を描くやうになつたか、繪を描くことが先で次第に山に喰ひこむやうになつたか、行き方は二つある筈だが、何れも現在では山から離れられない人達が、山の繪を描く畫家に多いのも事實である。上記の獨逸の山の畫家たちは、我が國のそれに比べて決して優れてゐると云ふことは出来なと思ふ。勿論私はその繪の原畫を觀たわけではなく、山岳雜誌に

掲げられたものを見たに過ぎないから、確かな所は云へないが。山を好む人たちによつて、この山岳協會の生れたことは、何としても吾々山の同好者にとつて悦ばしい限りである。山に登らない間においても、都會の一隅で山の繪の展覽會を見られるやうになつたのは、全くこの會の生れた御蔭である。この催しの直前には坂本直行氏の個人展が開かれ、吾々同好者を大いに悦ばし

た。斯ういふ展覽會を通じて最も感銘を新たにしたのは、繪を描く人々が山へ登つて非常な苦心を嘗めて作畫するといふ態度である。この苦心努力は必ずしもその繪にそのまゝ現はされぬ場合もあらうが、自然の中に執拗に入り込んでその本質的なものを掴まうとする態度に注意したい。同時に自然の觀察から何か今までのないものを掴んでいかうとする意氣込みが見えるのもよい。山といふテーマを定めてつらゆる角度からその表現につとめやうとすることは他の一般の繪畫の制作と行き方を大いに異にしてゐる。同時に山に許り限るといふ作畫の態度は、一種特殊な世界を切り拓いてゐる人々として考へられる。足立源一郎氏は山岳講座に「暖められたホテルの窓から食後のコーヒーをすゝりながら、適宜に構圖された山岳は、親しく氷雪の境を越して苦しい登攀を敢てする岳人の、心に映る山岳と同じものではない。若しこんな事を云つてよいなら、山の風景畫と山岳畫とは表現される内容において全く異つたものでなければならぬ。そこにはじめて山岳畫は、山岳に對して最も敬虔な心を岳人によつてのみ描かれる云々」と記して居られる。これは示唆多い提言であつて、意識的に、單なる山の風景畫と山岳畫なるものの表現内容に關して一つ差別的な注意がほのめかされてゐる。吾々山を好むものの心をうつものが、之から窺はれる。吾々も亦、山岳畫なるものが、之だけの意識的な根柢から生み出されることに同意したい。過去すでに山の再現を志し畫筆をもつ人々は多かつた。しかしそれは單に獨りびとりの道を歩いて來たのに過ぎなかつたと思ふ。足立氏のこの言葉が當協會の意思を代表するものとは決して思はないが、新たに結ばれた會としては又會員としてはある程度までの意識があることが窺へる。これから私は、山岳畫家なるものが、必然的に一方において山岳人であり、尠くとも山を好み山に關心を持ち得るだけの人々であることが求められてゐるのを考へる。深い大きな山から受ける感じは到底

謹啓

時下秋冷の候愈々御清祥奉賀候
陳者今春本會は名譽會員ウオルター
ウエストン師記念のため神河内に同
師青銅製浮彫像建立の計畫を發表
致候處時宜に適したる計畫として山
岳愛好者大方の絶大なる御賛成を得
て、去る八月下旬建立を完成致した
るは既に御案内の通りにて御同慶の
至りに御座候
而して今回右建立事業費用の一助
と致度趣意を以て左記方法により會
員各位に御寄附を得度と存候
就而御用繁多の折柄誠に恐縮の次
第に有之候へ共何分の御後援を賜り
度奉願候

記

一、御寄附は金拾圓以上と願上度
一、寄附者に對し原型製作者佐藤久
一郎氏による複製同師青銅製浮彫
胸像（同師署名入）を呈上す
大さき 縦五寸六分 横三寸八分
用 途 室内裝飾用にて柱掛又は
机上立何れにても可
一、申込締切期日は来る十二月十五
日のこと、但し右複製は四十個に
限り居候に付、申込超過の場合は
期日前にても締切可致
一、複製發送は来る十二月一日より
申込到着順により可致

昭和十二年十一月

日本山岳會

低い藪山などから味へるものとは自ら異つてゐる。山を探り入れた多くの風景畫なるものが、全く吾々山好きの者を魅する力のないのは、扁平な單なる風景として、それが探り入れられてゐるが爲めであらう。新しい手法によつて山での經驗の濃い人たちの描いたものが、繪としては美しくよいものであつても、吾々の心に訴へる力は多くの場合排除されてゐる。斯ういつた不満を、山をとり入れた多くの風景畫から感ずる。

結局、山を感ずる焦點が、少しでも山に入つてゐる畫家たちと全くその經驗をもたない者との間に合はないわけで、その感じ方の點において、差異があるのだと思ふ。だから雪に鎖された鋭い面をもつ高山の重々しい威壓とか輝いた光り、或は他のあらゆる深山の現象に對して、山への經驗のない畫家たちは、感興をおこさないばかりか、それをうけ入れるだけの用意が出来てゐないのではないかと思ふ。云ふ迄もなく、山岳畫なるものの發生條件が特殊なものと云ひ得るのであらう。この點、上述の山岳畫と山の風景畫の表現内容において區別しやうとした足立氏の言葉はよくこの間の心理を知らしめてゐる。要するに、山で經驗した所の實感を感つた表現があればあるほど、吾々の心に訴へる力は大きいものと云ひ得る。しかし、山を愛好する人々が必ずしも繪畫の秀れた鑑賞者ではない。時に、吾々は山

の感じといつたものを求めるの餘り、繪畫としての良否に對して、盲目に陥ることがないとも云へない。従つて、繪畫そのものの持つ價值と吾々觀賞者たちの間には、或る喰ひ違ひが出てくる場合も多いと思ふ。しかし何れにしても、山らしい山の繪が、山の人たちに享しめるのが當然である。

吾々は二科會とか國畫會といつた大きな展覽會で、所謂大家の富士山とかその他の山を描いた作品に接するが、そして繪畫としてはよいものとしてうけとるが、どうも吾々の考へてゐる或は求めてゐる山の感じといふものによつて心をうたれることが多い。さういふ制作に對して色彩とか技巧の點で新しい香りを感ずると雖も、どこか吾々心の隅にある山が禍をなして、心から感心する氣になれない場合が多い。何かしら、山に經驗をもつ者とさうでない人との感じ方、見方の差異といつたものを感じるのである。

勿論、時にはこの人は山も相當歩いてゐるからといふ先入觀念が吾々の觀賞に多少の禍ひを齎すこともあらう。然し、山に經驗ある人の繪でも、その表現技法の拙劣なために、全くつまらない山の繪だと思ふものにも接する。矢張り山で獲た感じとその現はし方がうまく合致しなければ、山の繪として心をうたれない。私は過日、通り掛りに銀座日動畫廊を覗いて偶然大家諸氏の舊作展を觀

た。その中に中川八郎氏の雪の山の繪があつて、素朴な美しい畫面をみせてゐたのに今更山の繪のかはらない魅力に惹き入れられた。別室には氣が利いた構圖と新しい手法の窺へる山をとり入れた風景畫といへるものもあつたが、何等山を感ずること出来なかつた。

然し山岳畫もその作畫意識を別にすれば、一般にいふ所の繪畫であり、廣義の風景畫であるから、山の人たち以外の多くの觀賞者たちをも對象としていくのがよいと思はれる。この態度は今迄山の繪に注意しなかつた人たちに向つても、山への關心を喚び起して、よい鑑賞者たちを多く作つていく過程ともなつていくと思ふ。

神河内の模型

ウエストン師の壽像が建設されたのに因んでか、どうかは知らないが最近、會員吉澤一郎君から自作の槍穂高を中心とする石膏製の山岳模型がルームに寄贈せられた。

測量部五萬分一地形圖の上高地より北の方、槍ヶ岳が入つてゐるだけ廣くなり南の方は中ノ湯で切れてゐる。その二十米づみのコンターに

従つてきりぬき、はりつけ、それを石膏に流し込んだものである。君のマッサーホルンの研究ぶり、ラヂオの研究家としての器用さ加減を知る私としては、その物に徹するやり方、

よい意味での凝り性、そして人一倍手先きの器用である君がこうした模型を作り上げたことはまた當然と考へないではないが、それにしてもいつも私の敬服する君の丹念な態度とその根氣のよさに今更ながら驚くわけである。

この制作にいつの頃から取かゝつてゐたか私もつきかかなかつたが、こんなものを作つてゐることをきいたのはよほど以前のことであつた。一本のコンターをきりぬくの全三日かゝつたといふ話も友達からきかれてゐたから着手から完成までは恐らく一年半か二年位の日子は費されてゐるだらうと想像される。君がいかに根氣強くあつても、たゞの人では出来ない仕事、山に特殊の愛着を有ち、殊にあの地方に特に親しみを有ち得ればこそこんなことを完成し得たのではないか。

大正七年會員の佐伯藤之助氏が作られた釧立山の模型はいまだにルームのよき飾り物となつてゐる。今吉澤君の丹精になる槍穂高の模型が贈られた、この一對の模型は日本アルプスの代表山岳を表徴するものとして長く會のルームを飾ることであらう。私は茲に會の一員として作者吉澤君に深い感謝の辭を送る。早くガラスの箱でも作つて納めたい。

(黒田孝雄)

柳本經武君を偲ぶ

茨木生

この夏、山からの歸り、而も眞晝の中央線、八ヶ岳甲斐駒を眺め乍ら垂崎に時間もあるので一寸下車しやうと思つてゐるうち發車、甲府も横目で過ぐし、夏の午後の太陽はまだ盛りのうち歸京した。

本年は事變中、關東防空演習も一段と緊張し、町會では活動始める、柄にもなく、私は救護班を是非と文句なしに町會の役員から命ぜられ、困つたが、心よく引きうけ、班員を勧誘し、準備に多忙を極めていた。或る日團服を着て演習に出る時黒棒の一葉のはがきを受け取つた。

父圭崎郵便局長柳本經武儀八月廿一日突然腦溢血症ニテ死去仕候間御通知申上候「オヤ」と思つて、ポケットへ納め考へたがどうしても眞實とは思へない。

柳本君に始めて遇つたのは昭和二年五月「簑の湯」に寫生旅行の時だつた。其れからしばしお越し誠に親切な人、殊に南アルプスの開發白鳳會に盡力され、勝手の様だが圭崎には最も適當な人を得たと私達は常に喜んでゐたのに。全く眞面目な正直な人だけ時々愚痴も出た、〇〇氏には充分世話をしたが、はがき一本くれない、尤も局長さんだけ特に氣にして、コボしたのも昨日の様に思へる。

地元以最も善良な人を亡したのは全く残念な事をした、氏の世話になつた人も数多いと思ふ、今更涙新にしてゆく秋を悲しみ誠に哀悼に堪へぬ次第である。

山登りについて (二)

ヤング

山登りの實際——他のゲーム或は集合動作と同じやうに、山登りの實際は二つの事柄に制約される。一は個人として動作する場合の我々の技術と経験とであり、一はパーティーの合一された共同動作に於ける我々の技能と経験とである。第一のために我々自身如何にして登山するかを學び、第二のために仲間と如何に協同して登山するかを學ばねばならない。後の場合に必要知識は大部分の場合の知識が自ら基本となるわけであるが、何か特別に新しい事柄に出會はない限り、この後の場合に於ける知識といふのは、要するに凡ゆる協同動作に於て各人が當然に負ふべき義務を綿密に履行することに要約される。この協同動作に對して、かゝる義務を要請するものは、グッド・マナーとフェア・プレイの二つの傳統である。グッド・マナーといふのは、如何に他の者の安全を期し、山登りを愉快に愉しませ得るかを考へることであり、フェア・プレイといふのは、山に對して、山登りなる傳統に對して、また我々のその時の成功に對して畏敬乃至尊重の念を以つて接することを強調することである。

責任——このことは一般に理解されてゐる以上に注意を要し、強調されてよいものである。といふのは、山登りが廣い範囲の人達の興味、目的物となり、同じ環境同じ傳統のもとに訓練された少數友達仲間の熱狂の對象ではなくなつたからである。英國人は知らず識らずのうちにフェア・プレイの精神を獲て居り、この精神がこの英國の政治、社會及びスポーツの傳統の基調をなすといはれるが、彼等は三つの義務に背かないやうに行動する。三つの義務といふのは、自分自身に對するもの、自分の對手に對するもの、ゲームそのものの有するスポーツ精神に對するものである。我々がこのスポーツ精神に對する責任を感じればこそ、スポーツそのものの勝負はともかく、この競技をよきものとし、その有する特質をよく生かせ、それを仕甲斐のあるスポーツたらしめるのである。山登りに於て我々自身の側に課せられる責任は至つて廣汎に亘る。そのうちには我々自身に對する責任がある。自己をして寸分の油斷もない、充分に能力ある、そしてひろい度量を持つ存在とすること、またこの山登りといふゲームが登攀するパアテ

イのために行はれるものであり、我々個人或は他の何人かの個人的榮譽のために行はれるものでなく、パアティ全體が山登りを最も愉快に味ふために行はれる事、同時に衡量する分別が完全に堅持され、安全に山登りが行はれること、こんな事柄を注意する事もこの責任の一つである。我々の第二の責任は、我々の對手即ち山岳に對するものであるが、これは至つて明瞭である。山岳を損傷したり登攀地或は遊山地として俗化したたりする類ひの凡ゆる目的、施設、干渉、汚損から全く解放され、それに影響されぬやうに山岳を保護し、それを永遠に、美の驚異の世界として、我々の修業場として保存するやうに努め、一時の氣晴せに無駄力を發散させるに手頃な機械たらしめないやうに努めることを會得するもの、この第二の責任に屬する。我々の第三の責任は、技としての術としての、傳統としての山登り全般に關する責任である。山登りの計畫は楽しいものではあるが、しかし山登りでの出来事や失敗も人前で公開できない祕密で面白い思ひ出を残すものである。山の中では第三者の立場に立つ傍觀者は多くない筈である。從つて他のスポーツで働きかけのやうな目撃者や見物人の意見といふものに、直接にも間接にも影響されないといふのが、山登りの特徴である。こんな影響は登山の精神にかへつて悪い感化を與へるだけで、

有益なことではない。といふのは、その影響が適切な暗示、有益な示唆を與へればともかくだが、そんなことはごく稀で、そして、登山が登山そのもののために行はれるといふことを妨げるからである。互に競ひ合つて——他を征服し敗らうとする氣魄希望は、スポーツに共通するが、しかし登山ではかへつてそれは第二義的な意味をしか認められない。多數者の意思によつて好ましくない影響を與へられがちなのがスポーツ全體に共通な弊害であるが、我々登山者は、幸にも大自然の恩恵を蒙つてかゝる悪感化を受けないでゐる事ができる。直接にはさうであるといへるけれども、事情によつては、間接にかゝる悪影響を免れ得ないこともある。例へば新聞や刊行物を通じて影響される場合がこれで、しかもそれは、スポーツ精神の崇光とか個人的功績の榮譽とかいふ効果的な辭句を連ねて追つてくるだけに、仲々油斷ならず我々は知らない間に悪い感化を與へられて了つてゐる。山登りの餘恵によつて我々は山登りを何處へ出してでも恥しくない行為とすることができ。この行為に對してはさういふ様々の詮議立てなどは少しも容るゝ餘地はない。我々の競ひ合ふ相手は、山であり、他の登山者ではない。我々の選ぶ山岳、その難を對手としてこのゲームを安全且つ公正にやり了はせればこれで我々は充分である。それでもなほ喚び足

らないと思ふならば、一層難しい登山を勝手に選ぶまでのことである。山岳は、自然力の産れる場所でありその力は稀には測り得ることもあるが、そんなことはめつたになく測り知れないことが多いものである。こうした力の凡ゆる型を確かりと呑み込むには、生涯かゝつたつて修得しきれたものでない。そうであるべきのに、他の國民或は他の登山者に向ふに廻して競争したり、氣晴しになるやうな世俗の比較論に耳をかしたりして、冒險を敢行することゝなれば、それだけでなく危険なこのゲームを一層危つかしい俗惡なゲームに墮せしめるだけである。小競合や狭量から生ずるこんな不自然な價值を純粹な登山の精神のうちに強ひて取り入れねばならないのならば、これは洵に登山のためになげかししい限りである。しかし、我々の登山はかゝる事から何等拘りのない獨自の自由を、大自然から惠まれてゐる、少くとも英國の登山史に於てはさうであるといへる。リーダーのこと——たとへ其の日歸や唯一一回だけの登攀に終る場合であつても、パアティは必ずリーダーを選定して置き、そして、あやしい或は險しい場所に面したならば必ず彼の決斷に従はねばならない。リーダーたる者の責任は多岐に亘るもので、靜動何れの場合をも通じてそのパアティ全員の統制、準備、注意、實施等の凡ゆる方面に及ぶ。

リーダーは優れた経験師たる必要はないが、彼自らが登山の體驗を多く重ねて居ねばならないのは言ふ迄もない。又バアティ全體の信頼を勝ち得なければならぬ。此信頼を當然にかちうるものと考へるのは誤りであつて、自ら責任を擔つて試みやうとするアドヴェンチュアが果して成功するかどうか、いざそれにかゝらうとする時は勿論、或はそれを仕遂げた後に於ても、そのアドヴェンチュアの成否の鍵となる凡ゆる諸要素を考量し得ればこそ彼はリーダーとしての信頼をかちうるのである。リーダーは衡量する確固たる分別を保ちうるやうに訓練されねばならない。そして氣象、時間等の山登りの相對的條件の外に、時々刻々に於けるバアティの精神的、肉體的情勢に關して、いつも冷靜適確な判斷を下し得る様でなければならぬ。更に彼は、彼自らは勿論の事、バアティ各員と共に山のディテイルを綿密に研究し合ひ、又各員の登攀技能を練磨し合ふ事にせねばならない、そうした餘力を各員に與へるやう心掛けるべきである。そして惡場に出會つては、バアティの全體の力がどこかで出し惜みされては居らぬかどうか、リーダーの決定した安全限界が侵害されては居らないかどうかを注意するのはリーダーの責任である。岩登りではロープのトップがリーダーとしての責任を擔ふことになり、そしてバアティは黙つて彼の意

志に従ふのであるが、何か疑念の生じた場合とか、彼の判斷や行爲が怪まれる場合に、責任を以つて決斷を下し得るのは、そのバアティのうちで最も熟達した者である。

技量の揃つたバアティならばその間の處置、命令は合議で定めることもできるが、しかし經驗の不揃ひなバアティにはリーダーは是非とも必要であり、各員の經驗が足らなければ足りないだけ、それだけリーダーの責任も擴がる。企てる登攀の特質に應じて、それを登るか、下りるかからむかによつて、各員の能力を充分考慮した上、リーダーはロープ上の順序を決定すべきである。

他の大陸に渡り大がかりな登山を行ふ場合は、リーダーの責任は更に擴大されて、人的關係の上に、地形學の領域から技術の領域までをおふことになる。若しも優秀な案内者を儲ふとすれば、その案内者に登攀の藝術を委せるもよいが、その戰略上の責任の全部或はその大半はリーダー自らが負はねばならない。特に破綻の生じた時、最後の斷案を與ふるのは、やはりリーダーの仕事でなければならぬ。程度の同じやうな熟練者、經驗を同じやうに重ねてゐる友達をバアティとするならば、相互の談合により都合よく事が運ばれ、従つてリーダーの選定は不必要なやうでもある。少くとも英國内の岩登りではそれでも充分であるが、しかし、これは破綻の生じた場合に混亂

を來す原因である。海外に出ては、リーダーの責任は自ら擴大するが、その場合にはリーダーの選定は是非とも必要である。

リーダーを必要としない様な氣のおけない仲間であつても、そのうちの一人が『お前リーダーをやれ！』と正式に責任を負はされて了へば、このことだけによつても、彼の引き受けた心には何等かのゆとりを生じてくるものである。そして、そのために、力を協せるとか急を要するとかいふ場合に彼の斷案は、異論なく確實に他の者達に受け容れられる筈であるといふ確信さへ彼には生じてくることになる。リーダーの選定に當つては、先づ第一にその者の人格とそれにより生ずる信頼とを考慮し

そして彼の登山者としての技能よりも、彼の特殊な氣質、經驗の程度、要するに「頭株」としての彼の能力を考慮すべきである。

山岳の選び方——我々はこれからどんな山岳に登らうとするのか。この選定について先づ第一に注意すべきことは、バアティの素質と技量とである。初心者には我々英國内の山を先づすゝめたい。未熟な者がいきなりアルプスなどの大きな山にぶつかつて見た所で、時間を浪費し、神經を搔亂させるだけのことである。初心者は先づ自身を充分に認識すべきである。この爲には初心者に對して樂な手輕な山を選ぶことをすゝめたい。といふのはそんな山登り

は彼にとつては山を知るチャンスが少く、喰ひ足らないかも知れないが却つて、初心者としての彼自身の力量を知り得るといふ點では最も効果的な仕方である。かうして、段々に練習を積み、バアティ全體の能率が向上し、安全限界が確かりと保持されることになれば、一層大がかりなアムビシヤスな計畫を企てるもよからうし、更に一段の進歩を遂げたならば、よく知りつくした土地で、より險しい滑かな斜面で技術に一層の磨きをかけるよりも、エクスペディションを試みる事をすゝめたい。その方が一層訓練になるし、興味も一層深く、兼ねて、企畫、組織の方法を教へられ、忍耐力や不斷の協力をも練ることになる。若い人達がかゝる先蹤者の傾向に進んでゐるのは洵に慶びにたへないことである。そしてかゝる目的地は何處がよいかといふことはこゝに擧げる必要はないが、しかしその目的地の選擇に當つては、バアティの組織、能力とその山岳が彼等に要求するものととの間の相關關係を綿密に考量せねばならない。たゞ地圖をくり攪げてエクスペディションを企畫し樂し合ふだけでは駄目で、行を共にすべき人達が今迄にどんな登山經歷を残し、危急に面していかに対策したことがあるかといふ事をも詳かに考慮して置くべきである。

山案内者——自他共に許されてゐる熟練者にとつて、自分の通曉する山に山案内を伴ふ必要はない。たと單獨では危いといふ登攀に要心のため伴れて行くとか、初心者が單獨行の場合に伴れて行くとかといふのは別の問題である。素人の熟練者を「山案内」代りにしはば使ふことがあつて、この傾向はアルプスでも漸次顯著になりつゝある。

アルプスでは優秀な一流の案内は相當の數に上るし、二流所の者ならば更に多く、普通の三流所の者はさらにある。アルプスの地元民の間に一流案内が次第に減つて來るといふのは一つには彼等が優れた登山者に伴はれて、彼から優れた體驗を傳授されるチャンスが極めて稀になつたからでもある。

長年アルプスで經驗を積んだ友達を伴れて彼等に初心者の保護訓練に當つて貰ふのでないならば、初心者には職業山案内を備ふのが最も適當であり、それには二流所の者でも充分役に立つ。といふのは、こんな山案内でも、その示す一舉一動は、知らず識らずの間に初心者にとつては初步的な適切な模範となり、かうして初心者は彼の動作を模倣する間におのづから技術を修得することになるからである。幾分でも經驗を積んでゐる若い同志にもえる者につては一流の案内が最も適任で、充分に役に立つ。一流の素人の登山者よりも一流の案内の方が優るといふのは、他の條件を同じと見ても、案内の方

は高度に馴致し易く、絶へず訓練されて居り、その土地に特殊な技術を得てゐる爲である。若い果敢な熟練者にとつてさへ、かゝる案内を伴て行けば、その技能を不知不識のうちに做る間に彼の業を立派に仕上げる事が出来るし、それによつて彼の動作に一層安定の度を加へることが出来るし、その間には何か大きな登攀を企てるチャンスにも自ら廻り合ふこともあるといふわけである。英國人の近頃のやる所を考へると、登攀能力の水準は次第に向上しつゝあるけれども、一層大きな登山のための仕上げは、なほ荒削りの有様にあるやうである。すべてスポーツの技術を立派に仕上げるには、優れた専門家と共に練習するのに越した事はないといはれるが、今日の山登りではかゝる機会に恵まれないため、自ら充分な仕上げが行はれてないのだらうと私には考へられる。

スポーツが堂に入るにつれて、優れたプロフェッショナルと優れたアマチュアとが組み合はれて、能率を高め、すばらしい効果を収めてゐるこれに關聯して「案内を伴れるか否か」の問題が長い間アルプスの論争の種となり、それが様々の偏見を生み、妙な雰囲気をかもし出したことが思ひ出される。しかし、かゝる雰囲気には立ち入らず、専ら山登りの立場から、この問題の解決に努め得れば、我々としては外に論議の餘地はない筈である。

一つのバアティが充分な能力を有せずそのため各員が目的の登攀に必要な安全限界を剩すところなく平等に保ち合ふことが明かにできないとならば、その時には豫め案内を備ひその助力によつてこの缺陷を補ふ事にせねばならない。同じやうに登攀の全過程が、困難な、或は次第に困難を増すやうな場合は、バアティの力と目的の登攀が要求する抵抗との相互關係を考慮した上で、案内を伴れるかどうかを決定すべきである。その外に銘記すべき事柄は、登攀が大規模なものとなつて來れば、その間に我々が個人として修練せねばならない幾つかの問題も新しく生じてくるし、バアティの人数も多くなることであるからそのうちには、我々仲間だけの熟練者にとつてさへ有益となる示唆を與へてくれる登山者も一人や二人は必ず混つて來るものである、しかもかゝる人は偶然その地に巡り合つた優れた素人よりも、地元の家内専門家のうちに多く見出されるといふことなどである。

山歩き——歩き方は各人の生活様式により夫々に制限されるけれどもこれは要するに個人の練習に俟つべき事柄である。道路やその様な平坦地を歩くのと、山を歩くのとは、かなりの相違がある。山の上で距離と時間とどつちが當てになるかといへばそれは時間の方である。如何に歩調をとるかといふよりも、如何に我々の力を節約するかが一層重要な

ことである。急迫した場合は己むを得ないが、それ以外の場合に無暗に急ぎ足に歩くのは馬鹿氣である。我々の動作に必要なことは、リズムである。これは脚のやうな局部筋肉だけを働かせてのリズムでなく、體軀全體が關與してのリズムである。登る場合に足を高くあげるとは、他方の足をスプリングとして使ふことであり、膝を必要以上に屈折する事と同じく非常な無駄骨となる。脚は軽く折り屈げるだけで、振子のやうに前へ振り出すのがよい。それに身

日本山岳協會 第二回展覽會

會場 大阪心齋橋大丸美術部催會
會期 十一月二十三日より二十八日まで(六日間)

趾先だけによつて山を跳り登ることとは無益である。踵はできるならば地面にピッタリと附いてなければならぬ——どんな目に止らないやうな僅かな地盤でさへ踵の支へにはなるからである。斜面が急に過ぎて來たときには、對角線上に或はジツグザツグに道を選ぶべきである。

自由に脚をふるといふけれども、それは勝手氣まゝにはない。必ず統制されて居らねばならない。そして脚はダンスの時のやうに正確に履み卸されることにせねばならない。かく正確に歩を進ぶとすれば、その足取りは山歩きの上手な者をつくりの歩調とさへなる。たいさうに締りなく脚を運ぶのは、デリケートな胸の構造にもまた靴のためにもよくないし、胸の筋肉を疲れさせ、耳ざわりでならない。

巧みに歩くといふのはバランスを巧みに探ることである。筋肉を無理に使つてまでバランスをとることはたとへ意識的でなく自然的であつても、無駄が多い。同じやうに巧みに歩くといふのは、一つのリズムを定め、いつまでもそれを一定不變に保つことで、それをかき亂して速くしたり遅くしたりすることは、そのために餘分に筋肉と力とを消耗することになる。いつでも同じリズムを一定不變に保つには、斜面、角度の變化するに従つて脚の振り工合を延ばしたり縮めたりすればよい。力とリズムが一定によく保たれるのは、各

一步に同じ力がかけるからであつて、各一步間を同じ歩幅に保つてではない。

山を降る場合には、身體のスイッチとバランスとだけではまだ充分な動作はできない。我々が脚と胸の筋肉でバランスをとらうとする努力は大したものである。この努力を減ずるには、正確に足を運ぶことが最もよい。これは疲勞を軽減するにも一層重要なことである。ガラガラと山を駆け降りるのは如何にも愉快なことに相違ないが、これは胸體などの筋肉を疲勞させる因である。上手に歩く者は、一日中長く歩き続けるやうな行程には、その間にこの降りの行程を適切に織り込んで計畫する。例へば、自分の體重を一步步にかけて運び上げて來た後には、この降りの動作を案配するといふやうに、そして動作に變化を與へ、それによつて元氣の恢復、氣分の轉換を計り、休息を計ることにするものである。登降の何れにも都合のよいリズムといふのは、勿論各個人の呼吸や筋骨の鍛へ方にもより、またその時の歩調や身體の條件にもより異なるけれども、各一步に加へられる力はいつても一定不變で、最少限でなければならぬ。どんな歩調にも、リズムを保ち、無理のないやうに脚を運び、そして正確に履みつけることを忘れてはならない。誰でも歩けるには歩けるが、歩くことの上手な人は至つて少い。一日中長い間歩きつゞけて

居れば、大ていの者はその日の終りには無駄のないリズムを得るやうになるが、さて次の日新しく歩き始める時にはこの調子を忘れて了ふ。上手に歩く人は、自分の歩調を整ひ、自分にシツクリしたリズムが得られるまでは、必要以上にユツクリとした歩き方が始まる。無理に餘つた力を出して見たいといふ氣持になつたら仕方がないから、歸り道のスパートにとつときにして置くがよからう。我々の歩く一歩々はスケイトやダンスのときのやうに統制された動作でなければならぬ。一見していかにも樂に登降してゐるといふ外觀はその歩調が統制されてゐるから與へられるのである。斜面の角度或は脚のふみかへのために是非ともバランスをとらねばならないといふのならば、この時の動作は、同じやうに正確に、感應的に、必然的に行はるべきである。人間登攀機といはれる完全な登山家のフランチ・ロホマツターのやうな人の歩き振りを注目してゐると、街道や氷河の上をまるで化物のやうに放浪してゐるやうである。膝は漸く屈げる位で、決して恰好のよいものではないが、足の履み方はいつも必然的で少しの無駄がない。動いてゐるの止つてゐるのかわらないやうな歩調であるが、それが力の節約されてゐる特徴なのである。だがさて、一と奮發といふ時には、今まで彼の全身に眠つてゐた力が一時に甦つてくるに相違ないが、その

力の大ききリズムとは今迄と全く異ならないし、身體の全機構を以つて最も難かしい岩の業を苦もなくやつてのけるが、その安定性、必然性は今までと何等異りがない。

他の數名の者と同行する場合に自分の舉動態度に氣をつけねばならない。疲労が増加するにつれて益々さうなのである。疲勞してか、或は氣分に動かされてか或者がノロノロと歩いて居るからと云つて、その者の先頭に立つて歩いた所で、必ずしも全體の足並を抄らせる事とはならないといつて、いつでも同じやうなそして餘り氣を苛だたせるやうな細かい歩調を先頭に立つてとることは特にさげねばならない。歩をのばして他の者を追ひぬかうとするのは、ぬかれる者にとつては迷惑になる。また猥ひ近道をしてこんな眞似をすることも、これがどんな行爲であらうか位の事は各人の判斷に委せよう。一般的に云へば、我々の環境が野性的になればなるほど、我々の元氣な健康状態、粗野な生活關係が文化から遠去かれれば遠去かるほど、山仲間として當然守るべき作法の道に我々が細心の注意を拂ふことは、益々緊要なこととなる。(D・U譯)

×
×
×

山の手帖から

(一)尾瀬にて

寂しさに堪えてし行かば深山路のおのが姿の思ほゆるかな

高原は遠白々と薄暮れて
今をしき鳴く夏蟲の聲

限りなく夕靄こむる高原に
白樺淡く二三もと立ちぬ

山もはや秋とはなりぬ白雲の
澄みわたる光のなかに

(以下至佛山頂上にて)

吾れをへだつ尾瀬の原もの遠けれど
燐ケ岳はいややに見ゆ

頂にころぶし仰ぎ行く雲の
流れに悠久の姿をぞ知る

雲の行き遙々るしもよ毛の國と
越後の山はひと續きなり

(二)谷川岳(耳二ツ)

幸を逃けき空に求めつゝ
果つる日もなき旅路行くかな

曉のかげさしそめば此の谷の
岩激つ瀧に光はおどる

杖立てゝ仰げば碧し秋の色

汝がとめ來にしかの秋の色

群山の果たてに遠き富士ヶ嶺や
その富士のみの雪を見しかな

上毛や信濃越後の山なみの
まなかひにして今日の秋晴れ

漆間のや煙動かずあほぐもの
行衛も知らに澄みわたるかな

夕陽かげ移るひ行けば天聲る
谷川岳の榮のいかしき

天そぎの谷川岳のいかつ尾の
その峠ごとのかけ移るひぬ

かたくたのうら寂しめど萎えたる
菊の花を見ざりけるかも

山を下り里を近みつ野路行けば
野菊がもとの蟋蟀の聲

(よしざわ)

陸地測量部新版地圖

五萬分一地形圖 新版

南湖大山(蕨澳十號)

タビト(同十一號)

合歡山(同十二號)

五指山(同十三號)

五萬分一地形圖 修正

錢函(札幌十四號)

二十萬分一帝國圖 修正

長岡、日光、宇和島、高知
(十二年七月三十日發行)



圖書紹介

一登山家の思ひ出

エミール・ジャグセル

尾崎 喜 八譯

四六版

昭和十二年八月、龍星閣刊

Souvenir d'un alpiniste の邦譯で

あることは茲に斷るまでもない。

こんど尾崎君の多年に亘る努力によつて、我々にとつて取りつきにくい横文字から、我々の言葉に移し植えられたことを深く感謝しないでは居られない。

アクサンが左に流れやうが右に止まらうが、よく分らない私にとつては、この翻譯が果してどの程度に原文を傳へ得てゐるかなどといふ事は問題外である。とにかくこの譯文をずつと讀んできて、少しの淀みなく意味の判りにくいか變だとかいふ感じなしに讀み了えたことから——極めて皮相的であるが——察するに浦松君のウィムバーにも比し得られる出來榮えであると見てよい。

こうした努力の結晶なる本書の内容については茲に紹介する必要はない。只私の讀んだ感じを一言すればアンリー・フアールを山について書かせたらこんなエミールのものにならうと考へたことである。エミールの繊細な感情の動き方、物に對する鋭い觀察眼を今更に驚かされもしまた彼の山に對する特別の愛を感じないわけには行かなかつた。若し我々の間でエミールの如き力と愛を以つて長年親しんだある山の地を、「サルグアン」風に物語つてくれたならば、どんなに嬉しいことだらうし、我々のためにもならうとつくづく感じたのである。この譯本には英譯へのランペールの序文が、彼の最も信頼するに足る傳記として五十頁も添へてあることも、エミールに對し、また我々讀者に對する譯者としての親切な思ひやりであつた。

それならば、どうしてこの譯がこんな成功を収めることができただらうか。

『多くの日本の登山家達が何をもつてジャバルを愛して來たか、又何が故に愛する様になるだらうかといふ其間の消息を私は凡そは解る氣がある。なぜならばジャグエルにあつては其の山へのエモウシヨンはいさかゝも特別な教養や解釋を通して日本風に換算する必要のない性質のものだからである。彼の熱烈で同時に優しい心の動きには毫末も吾々の理解を困難ならしめるものがない。』

彼の眞面目な美しい心の動かし方が、たゞちにそのまゝ吾々のものである。』と譯者があるものに書いてゐるやうに、私も原著の有するかゝる特色を認めるものであるが、この場合私はむしろこの理解し易いことを以つて尾崎君の謙遜の辭と見做したい。たゞ尾崎君がエミールを深く深く掘り下げて行つて到達し得た理解であつて、またそうした結果から見の原書に對する見方である。ともあれ尾崎君のエミールに對する特殊なる愛が、この成功を齎したものに相違ない、といひたい。

尾崎君その者は會でよく會つてゐる外に餘り言葉も交はした事もないが尾崎君の思考、觀察、環境は、前に出した文集『山の繪本』を通じてかなり深く覗ひ得る機會があつた。そして獨り微笑を禁じ得ないものがあつたが、いまこの「思ひ出」を讀み了つて私をひどく驚かせた。まるで尾崎君の云つたことがエミールによつて物語られてゐるのかエミールをそのまゝ我國に移し、生活して居るのではないかとさへ感じられた。『山の繪本』の凡ゆるものがエミールそつくりなのである。かうしたものと譯者と著者との氣持の上の一致があつて、その上に特殊な尾崎君のエミールに對する熱愛、山に對しての熱情が凝つてこの譯本をなすに至つたものだらう。

この本の出た今年八月は、恰度事變の眞只中であつた。そんなわけで

もないが、私はジャグエルの名と共に、その紹介者であつた大島君の兵隊時代を聯想させられる。我國の多くの山岳家が、ジャグエルの名を知るに至つたのは彼の一文のおかげであるが、彼の著作年報表を辿つて見ると彼の作は大正十四年のこと。して見ると彼の兵隊時代の作であるらしい。彼の居た中隊へもよく遊びにいつたが、彼はいつもニコ／＼しながら本を讀んでゐた。彼の被服棚には天井近くまでも本がうづ高くつまれてゐたが、恐らく友人から借用した山の本でもあつたらうし、そのうちにはエミールの一冊も混つてゐたらう。あのうす暗い電燈のもと、油とほこりで黒く光つた机の上で彼の一文も綴られたものかと思はれる。穂高であんな最期にならなかつたら、今時あの猫背に陣太刀一振ぶつさしてどこかの界限をのさばつてゐることになつたかも知れない。

ジャグエルがとんでもない思ひ出に横走りしてつた。妄言多謝(T・K)

アルプス記

松方 三郎著
四六版 三三二頁
昭和十二年五月龍星閣刊

ばアイガーのヘルンリグラートの如き初登攀を初め幾つかの華々しい登攀記ばかりが、この内容を成すやうにも受取られ、又さういふ紀行文を一般から期待されるかも知れない。しかし、この本の紀行文と見てもよい前半について見れば、ドーフイネとか、モンテ・モロとか、いふ地味な地名ばかり出てくる。そしてマツターホルンとか、モンブランとかいふ華々しい、そして人のよく出入してゐる山々の名は餘り見えない。それは、この時代にはもうさうした有名な山については登り盡され、記述され盡して最早や一般の常識とまでなつて了つたからには相違ないが、かうした普通の登山家に知られてゐる山は、松方の興味を引かなかつたのか、そして思ひ出も浅いものであつたに相違ない。彼は、コールドランの一節でこんな事を云つてゐる。

『苦闘十餘時間で完成した登攀必ずしも顧みて傑作である譯でもなく……謂はゞ山に叩かれて慘憺たる壊滅を喫したやうな敗戦も案外にかみ締めると味があつたりするものだ。そして愛誦おく能はずと云つた風の……思ひ出は不思議に思ひがけない小さな登攀に結びついてゐる。』

といふのもこの間の消息を物語るものであらう。だから、この本はさうした華々しい登攀は少く、著者にとつていつてもつきない思ひ出多いものばかりである。さういふ意味で巻頭から「フエーンもよひ」までの

諸編を讀まれるべきであらう。

「神河内」以下の諸編は、松方の渡歐以前又は歸朝後に行はれた、山の思ひ出、その山を廻つての、私達の近しい間柄の人々の辻村、板倉、大島諸氏等の追憶が現はれて來るので之また一入の興趣をそゝる。そうした思ひ出の外は、日本山岳界に於けるその時々時事問題が取扱はれてゐる。彼獨特の鋭い眼と筆とがこゝによく現はれて來る。主として、「會報」に現はれたもので、松方が締切りの期日を氣にしながら書なぐつてゐたあの頃の様子を今も判きりと思ひ浮べることが出来る。

本書の全體が登攀記と評論とからなつてゐるとは云へ、何となくゆとりあり、かう一冊になつてみてもなほ幾たびか繰返し讀みたくなるのは何のせいだらう。登攀記が單なる事實の記録であり、評論がたゞ問題に對する批判攻撃であるならば、そんな氣は起らない。その主な原因は彼の獨特な筆の力による處は云ふ迄もないが、彼の山を背景とする歴史、史實、人物、生活が本書の隨所に現れてゐるからだらう。

スويسでもさうであるやうに、彼は通り一遍のツーリストでなかつた。元來本のすきな彼のこと、ロンドンやスويس邊りの古本屋で山の本を買ひ集めてゐた。そして天氣の悪くて山にでかけられぬ日は山麓の小さな村でかたはしから讀んだに相違ない。また宿の主人や山案内相手

に有名な登山家達の話を書いたことであらう。またロンドンに歸つてはアルパインクラブのルームに日参して、そこに出入する「巨人」達に會つたり、山の本を見たりしてゐたであらう。また山岳會や地學協會に出ては自らあゝした「巨人」に努めて會ひ、話をきいたことである。かくして彼の物にした、山の歴史、人物、社會に對する彼の蘊蓄はすばらしいものであつたに相違ない。この蘊蓄がこの本の間に折にふれて現はれる。これがこの本に私達をひきつけて倦きさせない大きな點であらうと思ふ。しかしこゝに現れたのはその片鱗であり、恐らく彼を取圍んでこうしたものを彼から引ばり出したら幾時間でも切りがないだらう。

松方はこの本一冊を残して北支に文字通りとんで行つた。戦線の進展につれて報導陣も擴まるばかり今の生活は恐らく山とは全く縁もゆかりもないものだらう。それにしても最近の便りでは至つて元氣に活躍してゐるらしい。ニュースの筆をおいた直後、或は窓ごしに、或は高梁の葉末ごしに見えるだらうと思はれる、天山からこつちにつゞく山の端をどんな思ひで眺めてゐるだらう。あの山々をこえて西へ西へと進んで行つても見たくなるだらう。二た昔前一緒に行つた、南口、八達嶺の思ひ出、張家口の景物など今親しく味つてゐることであらう。著者の健闘を祈る。

(黒田記)

會員通信

北支便り

折角の計畫(ウェストン壽像建設)最後まで見とけることが出来ずに誠に残念であります。皆様の御蔭様で立派に出来上つて、喜びこれに過ぎるものがあります。

北支の兵隊さんを散々悩ました雨も上り何とかそれらしき秋朗と相成り、中屋なども兵隊さんの残飯で肥え、この所「馬」振りを遺憾なく發揮して居ます。

〇〇さんにも社のものが、〇〇方面でぶつかり名刺をもらつて來ました。北支とは申せ、その廣さ、そして日本軍のあの數の中では如何に新聞屋で大きな顔をして方々に首をつつ込んでゐても仲々ぶつかるものはありません。あの連中はもう〇〇に入つてゐるでせうが、折角御無事を祈つて居ります。

會のこと色々御心配感謝致します。何しろ出かけがあの通りのあわたしきなので、色々氣にかゝり乍らそのまゝと相成り、伊藤屋などもどうしてゐるかと考へて居ります。西堀今西なども今頃は陣太刀造りの一振りぶらさげて天津界隈を歩いてゐるのではあるまいかなど考へたりして居ります。

理事、評議員の皆々様によろしく。

もう少し出征軍人がふえたら日本山岳會北平支部位遣らうと考へてゐます。北平に學をとめてゐる帝大の釣田君の説では仲々登るに過る山があり相です。

九月二十六日

北平にて 松方三郎

戦線より

お便り拜見。小生平漢線方面の最前線に出動、裝甲列車に乗つて二十四日新聞記者としての〇〇一番乗り成功、本日北平に歸りました。山岳會の仕事など例によつて失禮して居ります。皆様の御健康を祈ります。

九月二十六日

北平にて 中屋健一



會務報告

十月定期理事會

十月十四日日本橋日本商工俱樂部出席、木暮、高頭、茨木、角田、

横、木村、西堀、高橋、津田、島山、島田、黒田。

一、山岳第一號編輯

退會者

- 一、ウェストン記念事業ノ件
- 一、新理事推薦ノ件
- 一、新入會員薦考
- 一、關西支部報告

昭和十二年十月

一三四七 群馬縣

高塚 和雄

新着圖書

ケルン 十月號 同編輯室
山小屋 同 朋文堂
寫眞月報 同 小西六本店
ツースト 同 J・T・B
野鳥 同 日本野鳥の會
地學雜誌 同 東京地學協會
登山とスキー 同 其
北アルプス(白馬から黒部) 肥後山岳クラブ

陸地測量部年報 昭和十年度

小島鳥水著 偃松の匂ひ 著者

L'Oeuvre Scientifique du Club

Alpin Français (1874-1922)

Geographical Journal 9

Die Alpen 9

Rivista Mensile C. A. I. 9

The Mountaineer 10

Trail & Timberline 9

The Prairie Club 9

Planinski Vestnik 9

Battletti del C. A. C. 7-8

昭和十二年十月三十日印刷
昭和十二年十月三十一日發行

發行所 東京市芝區平町一(不二屋ビル)

發行所 日本山岳會

電話(六四五)一六四九

印刷所 東京市小石川區戸崎町一三

印刷所 多木印刷所